

第二十一回

学力とは何か(一)

「子どもの学力を上げよう」という冊子の特集をみて、「お勉強がで
ないから塾に通わせよう」というお母様も、お勉強がでる教材を探すための
講習会。アンダーアーマーの親の70%は子どもの学力を下げたという思っ
ており、そのため「塾や英会話に通わせる親が70%」という記事がある。
しかしこの特集には、「学力とは何か」という度も問われない。だから、
「学力を上げる」＝「勉強が得意になる」と決めつけている。
そのことを考えると、幼児教育は対決する。
学力とはそもそも何なのか。お勉強できる力は、学力の「一部」に
すぎない。
学力とは学ばない。学ばず、受け取る行為である。その典型は聞
くことである。聞く行為こそ理解力であり、理解力のない学力は
あり得ない。
十歩の歩みで、勉強する力を学力だとしよう。それならばよく勉強させよ
うと考え、「小学校」「三年生の学習内容を身に付ける」塾に通わせるかもこ
れない。しかし、ちよつと書いてみる。
早く始めたから早くできるものになったのだから、学力が上がったわけ
ではない。パフォーマンスが「早く早く」だけではいけない。
も親は「早く」のがごとく考えます。根拠はない。ひょっとして早く競争
争心だろつか。ちや、人生のルールも早く着く方がいいですかねえ。
みなさんはトレーニングする子どもを育てたいですか。ボルトは TRAINING
で失格になりました。

幼児期に小学生の勉強がどれほど何の意味があるか私にはわからない。



広告を丸めて作った棒。
つなげてつなげてあまりに
長くなったので、どのくらい長
いか体で測っている。その長
さは、「僕とA君とTちゃんと
M君と...を合わせた長さ」。
身体性と人格性が含まれた長さ。

そういう塾の人にしていくだけだと、納得いく答えは得られなかった。
漢字でも計算でも、させればできるものになる。でも三年生の勉強を五歳の
子どもがしたら、五歳どころかできないことばかりなのではないか。三年生になっ
てからか。それとも大人になってからか。年齢に応じてその時々の時にしか咲
かない花があるのに、早期教育はその花を咲かす機会を奪う。人生の時間の
も豊富にしたいと思慮不足です、私は早期教育に反対する。
勉強する力の基礎は勉強というものは作られない。その「基礎」とは、幼児
期に育まなければならないものである。だからひょっとして「勉強はしません。
でも勉強の基礎は育みます」と言っている。
学ばないことは人間であることの喜びである。それなのに、なぜ小学校
に上がった子どもたちはあだのまの「勉強はきらい」というのか。
やむを得ないからかである。自彗性が発揮されていくからかである。
自彗性を育てるのが幼稚園の使命である。この課題は、生涯にわたるほんの
大きな課題なのだ。自彗性や主体性は「教える」ことにはできない。だから
「教える」のが主ではない幼児教育「楽しむ」こと、この課題は担われる。
「それではなく、自ら進んで勉強することが一番大事。教えることでは
なく主体性を引き出します」と塾の人も言っている。主体性が大事だといっ
たのはその通である。しかし、大人の描いたプログラム通りに進んでくれる
ことを主体性など言いまわかしは注意しよう。主体性という一大事をあ
らためて見なければならぬ。

次に、自彗性と、学ばないことと受容性との関わりを考えてみよう。

第二十二回

学力とは何か(二)

前回、学力とは学ぶ力であると言った。学ぶとは受容的なものである。自覚性(主体性)とは、自分を發揮する力。発露性とは、自分をプロットする力。

そこだけみると、能動と受動という矛盾がある。この方向の様だが、その二つは構造的に結びついている。

幼児教育とは主体性を育てる仕事である。主体性とは他人から「ああしなさい。こうしなさい。」と言われず、「自分からする」ということ。自ら進んで勉強する。なら主体的で結構なことのようだ。が、そのために幼児期から勉強をやらせようとするのが、身に着けようとするのか。

ただ、あの高校の先生が言ったので、「進学校はいいですが。」とつぶやいて、「中身はあんなに。」ただ勉強が好きなことだけの違い。どうして返事。

進学校の生徒は、その勉強が、できる生徒たちであって、勉強が苦手な生徒たちであって、言われたことは器用にやるけど、「指示待ち」であって、主体性は育っていない。そのぶん、一人一人の強みを伸ばして、このようにもする。

主体性が育っているとは、一人一人の強みを伸ばして、このようにもする。周りが何を言おうと自分を責めようが、自分の強みがある。「みんながゲームを持っているのはいいけど、うちのチームもゲームの言葉で遊ぶ大人には、主体性が育っている。いい感じだ。」

好き嫌いの自己主張のしつこい程度に、この主体性が育っているかどうか。それは、学ぶ力が育っているかどうかである。大学の講師をしていただくと、新年度の講義の最初、時間を使って、その講義の何が面白いのか、この授業の何が来たのか。



という問いを学生に突きつけること。それを、大学で学ぶことに何の意味があるのか。を考えてもらうことにしなげ、そうして、自分が今どこにいるのを感じてもらい、そのことを目指したのだ。罵倒に近い言葉を吐くことで考えさせる。その時間をとったのは、学ぶ動機を持たないで大学に入ってくる人があまの多いからである。

「先生の授業はほんのイメージとは違った」というのを授業に出ない理由がある。その人は何も学ばないのだから。十二時間の講義後の答案に「ほんのイメージ」から始めて、授業内容を全く理解していない浅はかな解答を延書き続ける。その人は何も学ばなかったのだから。このように、学ばない故の空虚な主体性、なのに尊大なプライドは、なにかかして、折ってやらないと、不幸である。その発想を委ねないと、就職しても「自分の好きなこと」はなかった。「社風が合わない」とか、いつ、たやむの辞めようか。

主体性を育てようが、六三四の学校時代を通じて、この困難な課題であり続けるか、学ぶとはいかに難しいか、おわかりいただけただろうか。親は子どもの将来を思いつつ早くから勉強をせよとみたりするのだけれど、それが本当に子どもの学力につながるのか、疑わしく思えてきました。

仕事をやる際に必要とされる力は状況判断力である。「勉強」とは、具体的な状況を切り捨てる、一般的な解答に至るトレーニングである。状況を見る。自分がどうあるために、自己中心的ではないか、発露する力が必用である。発露とは、どうあるのか。五感である。五感とは体験によって開発された鋭いものである。だから幼稚園は体験の多い学びの場である。

深い受容性は、あらゆる方向に強く主体性を生かす。受容性を通じて触れている世界が、主体成立の源であるから。回感と受容性、この二つは、学びが、世界の体液を自分の血液にするようにできる。